ガリレオ・ガリレイゆかりの地、フィレンツェ　　２００３年６月

フィレンツェの市内を東西に流れるアルノ川にかかるポンテ・ベッキオ橋を南に渡って、コスタ・ディ・サン・ジョルジョ通りを進むと、すぐに上り坂になる。石畳の路を上ってしばらく行くと右手に見える家の壁にガリレオの肖像画を見つけることができた。肖像画の下には、「カサ・ディ・ガリレオ・ジョバンニ」とあり、肖像画の両脇には２人の女性像があった。この女性像は恐らく次の日、サンタ・クローチェ教会で訪ねることのできたガリレオの墓の肖像画の両側に立つ２人の女性像と同じもので、左が天文学、右が幾何学の女神だと思われる。ここはガリレオがパドヴァから１６１０年に移ってきてしばらく暮らしたところだ。なんでも、ジョバンニというのは「若い」という意味だそうで、「若き日のガリレオの家」というところだろうか。

通りをそのまましばらく行くと、大通りであるヴィアーレ・ガリレオ・ガリレイ通りと交わる。これをそのまま横切ると小道になり、短いヴィンチェンツィオ・ヴィヴィアーニ通りを通り過ぎてヴィア・パイン通りに入る。ちなみに、ヴィンチェンツィオ・ヴィヴィアーニは数学に優れたガリレオの助手で、後に名高いガリレオの伝記を残している。しばらく行くと、右手の林に面した通りに「天文観測所」の表札が見られ、ここはガリレオの頃から、観測に用いられたということだった。通りを右に曲がると、緑豊かな斜面に散在する木々と遠くの丘、それと先ほど表を通り過ぎた天文台が見えた。あいにくの小雨で、晴れていたらさぞ緑も鮮やかなことだろうと想像されたが、小雨に煙るトスカナも悪くないものだと思った。この景色はガリレオが目にしたものとあまり変わらないのではないだろうか。さらに進んで右に曲がる角辺りに、ガリレオの胸像を掲げる家があった。思わず写真に納めた。ガリレオは異端審問後、亡くなるまでここアルチェトリのイル・ジョイエーロと呼ばれた家で過ごした。そこから歩いて数分のところにサン・マッテーオ修道院（サンマッテーオ・ディ・アルチェトリ）がある。ここはガリレオの２人の娘が修道女として生涯を過ごした修道院である。意外と近い。とはいっても軟禁状態にあったガリレオは恐らく娘に直接会うことは許されなかっただろう。長女の修道女マリア・チェレステは父の帰還をあれほど待ち望んでいたのに、それから数ヶ月後に病気で亡くなっている。ガリレオの落胆は想像を絶するものだったようだ。

修道院は思ったよりこじんまりしたものに見えた。門にはしっかりと鍵がかかっていて中の様子が分からなかったが、二階の窓からシスターらしい人影がちらと見えた。現在はカルメル会所有になっているが、当時はアッシジの聖フランシスコによって創立された聖クララ会（清貧女子修道会）によって運営されていた。

サンマッテーオ・ディ・アルチェトリ通りを過ぎ、細い小道を遠くの景色を眺めながら下り、スオル・マリア・チェレステ（修道女マリアチェレステ）通りを通ってバス通りに出た。ちなみに、近くのヴィアーレ・トリチェリ通りの「トリチェリ」は真空の研究で有名なトリチェリで、書生として同居し、ガリ

レオの最期を見取った人である。

ここから、散策の最後の目的地として、異端審問以前にガリレオが住んでいたベロズグアルドに向かうことにした。前号の「ひろば」でご紹介した「ガリレオの娘」によれば、フィレンツェに来てからのガリレオはしばしば健康不順で、友人で門人でもあったサルヴィアティの勧めで「よい空気を求めて」フィレンツェの西２０キロのところにある彼の別荘であるセルベ荘に移ったが、しばらくしてサルヴィアティが亡くなったので、フィレンツェの南の丘のベロズグアルドに引っ越したのである。そこからサンマッテーオ修道院まではロバに乗って４５分ほどかかったという。だいぶ足がくたびれてきたことでもあり、相棒のＳ氏（ペルージャ滞在中の中学高校の同級生で、この散策の案内をしてくれた）と共に昼食を取った後、しばらくバスに乗り、再び歩いて丘の上のベロズグアルドに行き、記念碑を見ることができた。この丘の上からはフィレンツェの町を象徴するドゥオーモ（カテドラル）と美しい町並みが見えた。ガリレオの時代には既にデゥオーモをはじめとするたいていの大きな建造物はできていたはずで、おそらく当時とそれほど大きくは異ならないであろうフィレンツェの町を眺めつつ、ガリレオ父嬢の在りし日をしばし心に描いたことであった。